

## あたり前子育てとは？

0才～6ヶ月”赤ちゃんの抱き方——— 顔を見て”

### 第一のチャンス

生まれてすぐの何十分間、赤ちゃんは、ランランと目が輝き、覚醒水準も非常に高い時で、親と子が出会う絶好のチャンスなのです。どんなお母さんでも、この瞬間に、子供と目を合わせていればかなりいいわけです。

### 第二のチャンス

生まれてから 15 日くらい、乳房をふくませて(母乳が出なくても)抱くことです。この頃の赤ちゃんの見える範囲は 15 センチくらいで、ちようどお母さんの顔が見つめられるわけです

### 第三のチャンス

3ヶ月くらいまでは、平らに寝かせ自由にさせておくとフェンシング反応と言って、首の向いた方向に手を伸ばしもう一方の手は、ちょっと縮めて、足もそうしながら自分の手を見えています。これが神経回路を造成するのに物凄くいいので、たっぷりと自発的にやらせてください。

### 第四のチャンス

3ヶ月くらいというのは寝てばかりいる時代。その時、ゆりかごコンビラックは一切使わないこと。ゆりかご、コンビラックは心の殺人器になります。何故かという、この時期は遊びの抱き上げを楽しむ時期で、平らな所においては抱き上げ、抱き上げては置く(水平と垂直を学習する)つまり、平らとはこういう感じで、そこにたつとはどういうことかと、立つことの原型がここでしみじみと分るのです。身体の動きとしての「立つ」だけでなく、言葉で「立つ」が入る。いろいろな「立つ」ことを学び、意欲を目覚めさせるのです。

頭から倒れて大けがをする子が増えています。それは、生後3ヶ月のときに、しっかり縦・横の学習が出来ていなかったからです。そしてこれらの「触れ合い6ヶ月」がうまくいった場合、赤ちゃんの方から縦だっこを要求してきます。「横、斜めに抱かれているだけではイヤダ」というわけです。これを抱き癖がついたなんて思うのは、もったいない話です。

「ソフトにギュウ」の触れ合いが記憶の元にも関係していることが脳の研究などからわかりかけています。

“お母さんに抱かれて揺られて、凄く幸せ”と思うこの幸せが、神経ホルモンをシューっと出し脳細胞が枝をドンドン出し、回路がグングン発達するのです。

赤ちゃんは6ヶ月間ただ身体が大きくなるだけでなく脳の記憶の性能を上げるというかけがえのない仕事をしているのです。

### 《チェックポイント》

うつ伏せにして、頭を上げようとする意欲あれば「触れ合いは成功している」ということになります。それがベターとして頭を上げる気力もないまま6ヶ月まで行くと、パラシュート反応（転びそうになると手が出る）がでなくなるのです。

## 6ヶ月～9ヶ月

### “触れ合っていたのが離れ、また出会うという出会いの6ヶ月です”

この時期は、遊びを（イナイイナイバー、かくれんぼ、タカイタカイ、鬼ごっこ…触れ合い出会いのミックス）十分にしておけると“幸せ”がグレードアップするわけです。

要するに1回「見失うかな」と、ハッとしてから「ホッ、やっぱり大丈夫だった」となると、幸せが何倍にもなりますよね。（受験生くらいにも効果があるそうです。例えば登校前に親が、わざとケンカを売って、カンカンに怒らせて送り出す。そして帰ってきたら、芝居っ気たっぷりに、オーバーに歓迎してあげること。要するに、子の“出会い”体験は注意力を育てるわけです。周辺視野も中心視野も生き生きしてきて、テストで気が散っていた子がグッと落ち着いて問題に集中するようになるのだそうです。）

次に何かに夢中になっている時（大人から見れば悪さが多いのですが）静かにそばによって行って名前を呼ぶとか、「コラァー」と一声あげるとかするわけです。

そうすると子供がビクッと飛び上がる。これが“交差性注意”といって、本人が夢中になっている時、別の視線がきてパッと当たる。この体験がいろいろな場面でも安定して仕事ができることの元本になるわけです。

これらとともに欠かしてはいけない最も大事なものがあります。

“目が合う”こと、“親になつく”こと＝“人見知りする”ことです。人見知りはしないほうが良いという錯覚がありますが、これは、グレードの問題で、親も含めて全然誰にもなつかないのが、一番グレード

が低く、つぎは親にだけなつくのです。

一番いいのは、親にたっぷりなついた後に、誰にでも積極的になつく。どちらにしても、“人見知り”の時期を通過しないと、情緒に弱さが見られます。

この時期は、立つ、歩く、話す、と共に、これらの点をやっておいの方が一生の財産になるわけです。

## 1才～2才

### “学びあいの1年（ギリギリごっこ）”

1才～親の顔をうかがいながら悪さをするようになります。「こんな悪さを放任していたら、ろくなものにはならない。」と思うのはマチガイ。敵がギリギリならこっちもギリギリでいこう。これがいいのです。弾圧するのもダメ、お好きにどうぞも良くない。「ヨシッ」と親もギリギリの一線をどこに設定するかを楽しむ。これがいろんな場で、効いてきますね。親とギリギリ張り合っ、とうとう負けて泣いた。そういう涙は非常に生きてくるわけです。

耐えて自分を従わせる態度が非常に伸びます。（抑制力）これが「短期記憶」の元なのです。

そして我慢や納得が出てくるわけです。この我慢が出来たら、1年間の子育てが成功したという目印です。

## 2才～3才

### “語り合いの1年です（指差しごっこがポイントです）”

「あれ、なあに」といつてくるのが非常に大切です。2才～3才は子に指差ししてもらって、対する大人の方もまわりなんか気にしないでオーバーなくらいジェスチャー交じりで答えてください。子供は感動を伝えて、共感を要求してくるのですから。

次は“見立て”なのですが、具体的なおもちゃはむしろ邪魔です。座布団を丸めて赤ちゃんに見立てたり、四角い箱を押して「ブーブー」と遊ぶ。この方が、イマジネーション（想像力）が生き生きと目覚めてくるのですよ。変に自動車っぽい形のあるおもちゃだと「何ぞや？」という抽象概念が目覚めない恐れが多いのですよ。

もう一つは「キャッキョ遊び」で微妙にズレを楽しむ。こうくるかなと思うと、ちょっとズラシテくる。その意外性が嬉しくてたまらないのですよね。最後は「自分でやる」

従って“語り合いの1年”これらができると成功と言えるでしょう。

こういう潮時のポイントを押さえていけば、自然に親子関係が成立し、子供は健やかに伸びていけるわけですが、その中で忘れていけな

いことは、父親の育児参加の必要性がひと昔と違い重要な役割を果たしていることを忘れないで下さい。

まずはこれらの段階を踏んでいけば「3つごの魂百までも」ということになるわけですね。

昔は普通にやっていた育児が、“お金のかかるほうが値打ちがある”と考える近代化の中で、無価値と見なされ忘れ去られていたものが、科学の力で再発見されたということですね。